

国立病院機構の病院濫觴考察

福永 肇

金城大学 社会福祉学部

【はじめに】日本の国立病院・療養所は昭和20年12月に占領軍監督下にあった旧陸軍・海軍病院、傷痍軍人療養所が厚生省に移管されて発足した。昭和22年には日本医療団の医療施設の多くも国立に移管され、国立病院体制が固まり、整備拡充が行われた。しかし再編成計画（昭和61年）以降の約20年間に約4割の施設が削減され、その後も再編成が続いた。平成16年に全国154の国立病院・療養所は、独立行政法人国立病院機構（以下、国立病院機構と表記）という単一の法人形態で再出発する。国立で残っていた6つのナショナルセンターも平成22年に個別の独立行政法人に移行し、現在、国立は13の国立ハンセン病療養所だけになっている。

【目的】上述から日本の国立病院・療養所は昭和20年に旧陸軍・海軍病院を主な起源として発足し、半世紀間存在していた医療施設と要約出来よう。本研究では時間の流れを逆に変え、「それでは現在の国立病院機構において、旧陸軍・海軍病院等を源流とする病院はどの病院で、その病院数はどれだけなのか」という視点で、調査分析を行う。また開設年、病床数、種類別病床数などの調査分析も併せ行い、国立病院機構の病院構成・特性の把握を目的とする。

【方法】平成29年4月現在の国立病院機構の全病院142の個々の起源と歴史、現在の種類別病床数の調査を行った（これは艱難辛苦のデータ収集となった）。国立病院機構の病院は移管、再編成、国立同士または国立以外の病院との統合など様々な変遷の歴史を持つ病院が多く複雑である。本研究における「起源」は最も古い設置主体とすることを原則として整理した。ただし日本医療団の病院・療養所であった29病院は全て日本医療団の設立年昭和17年とした。

【結果】この抄録では歴史変遷の叙述は避け、数字結果だけを記す。現在の国立病院機構の142病院の起源は、陸軍病院60(42.3%)、海軍病院14(9.9%)、傷痍軍人療養所29(20.4%)、日本医療団29(20.4%)、戦後の新設等10(7.0%)であった。種類別病床では、142の病院の内140(98.6%)が一般病床を保有し、一般病床の合計47,491床は病床総計55,005床の86.4%を占めている。精神病床をもつ病院は29病院であり、そのうち精神病床のみの精神科病院は2病院であった。結核病床の保有は46病院、療養病床8病院、感染症病床13病院となっている。国立病院機構の中で、最も古い起源をもつ病院は大阪医療センターと大阪南医療センターで1870年創設の最初の陸軍病院を始祖とする。反対に最も新しい病院は釜石病院で、1953年に対日援助見返り資金で造られた国立釜石療養所を起源としている。

【考察】陸軍・海軍病院を源流とする病院数は合計74で全体の52.2%であり、意外と少ないと評価される。一方で、傷痍軍人療養所と日本医療団を源流とする病院が各々29病院（全体の20.4%）あり、現在の国立病院機構における重要な要素になっていることが判明した。国立病院機構は様々な出自、歴史を抱えた病院の集合体であるとの解釈が出来る。保有病床数は最大730床、最小138床で、分布は7百床台4、6百床台7、5百床台18、4百床台36、3百床台44、2百床台23、10百床台10となっている。日本の病院の約7割が2百床未満であることから勘案すると、国立病院機構は中規模病院が多いと言える。

【結論】現在の国立病院機構の142病院は、単純に旧陸軍病院（病院数で42.3%）、海軍病院（同9.9%）の後継であるという理解ではなく、様々な出自、歴史、医療目的をもつ病院の集合体組織として捉える必要性が判明した。